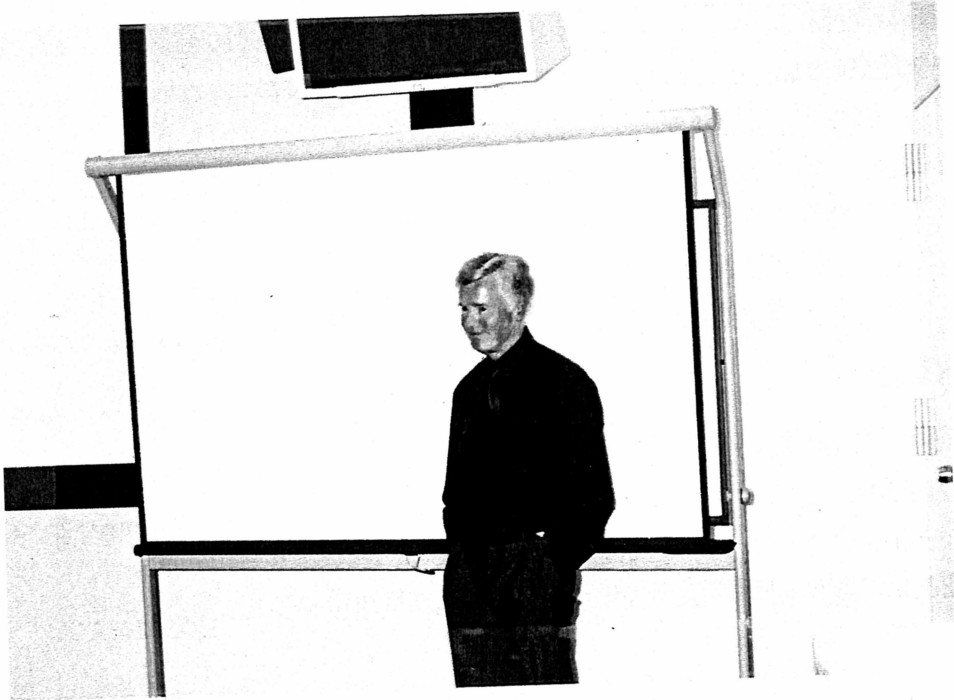


京都大学地理学談話会

会 報

第11号



談話会でのPowell教授

2000

[目次]

寄稿	1
講演会の報告〔J.M. パウエル先生、田中和子先生・堀健彦先生〕	3
研究室便り	10
〈足利健亮先生のご逝去について〉	10
〈応地利明先生のご退官について〉	11
〈客員教授久武哲也先生のご着任について〉	11
〈国際交流について〉	11
〈研究室の動静〉	12
〈3 回生の自己紹介〉	12
〈昨年度の実習旅行〉	13
〈学部卒業生・院生の進路〉	13
〈院生の研究状況の報告〉	13
〈2000 年度講義題目〉	15
事務局から	16
〈地理学談話会 1999 年度会計報告〉	16
〈訃報〉	16
〈お知らせ〉	16
〈2000 年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ〉	17

寄稿

「阪神大震災から 5 年」

久武哲也

(昭和 45 年卒)

今年の 4 月から 1 年間、客員教授という資格で地理学教室に寄留させてもらっている。京大まで毎週通うのは 10 年ぶりである。私が地理学教室の助手をしていた時期（1973 年 4 月～1974 年 9 月）に較べると文学部も大きく様変わりしてしまっていて戸惑うことばかりである。百万遍界隈の店もかなり変った。しかし、文学部の東館（旧「新館」）の煤けて、「アジビラ」が貼りまくられている演習室のドアや壁を見つけると、かつての学生時代の「政治的喧噪」を思い起こさせてくれて、無性に懐かしいが、新しく最近建てられた西館（現「新館」）はエレベーターまで付いていて、私にとっては何か迷路みたいな気がしている。

毎週一回ではあるが、JR で桂川を渡って市街地に入ってくると京都の静かな落ち着いた家並みが緊張をほぐしてくれる。他の曜日は吹田市の自宅から本務校の甲南大学まで通っているが、神戸にむかって武庫川を渡り、西宮市にはいると今でも心がひきしまる。というより、心が沈むのである。1995 年 1 月 17 日の阪神大震災で甲南大学の主要な建物は亀裂が入ったり、倒壊したりしてしまっていて、その

後 3 年間は「運動場」の仮設プレハブ校舎での授業をしいられたし、大学周辺の古い木造の建物、家屋は殆んど倒壊して、現在でも礎石だけが残った空地が多く残り、雑草に埋れているのをよくみかける。私の研究室の建物や体育館、残った校舎の一部は約 1 年間は、大学周辺の住民の仮の住まいとして開放されていた。プレハブ校舎は 2 年前に解消され、新しい校舎も建てられたが、既存の研究棟の一部には細かい亀裂が残っている。

大阪の方から武庫川を渡ると、風景が一変する。灰色の画一的な鉄骨の入った新しい家屋が急に増え、すべて瓦ではなくスレート葺きの屋根をもち一見してすぐわかる。そして新しく再建された家屋の間には、歯こぼれしたように草の茂った空地が残る。戦前からの格式をもった木造の家屋や土倉のある屋敷地は、その住人ともども殆んど市街地から消えてしまった。甲南大学の周辺、とくに東灘区の住吉川以東の地区は住民の死亡率が最も高かった所である。大学周辺に住む戦前からの住民の中には、「3 度生きのびた」とも「一生に 3 度家を建てた」という人々もいる。昭和 13 年（1938 年）の「阪神大水害」と昭和 20 年（1945 年）5 月からの「神戸空襲」、そして 5 年前の「阪神大震災」である。

☆

昭和 13 年の阪神大水害の折に、甲南高等学校（旧制）に勤めておられたのが談

話会の大先輩であった故・松井武敏先生であったが、先生はこの時の水害の記録を克明に残されている。石橋五郎、近藤忠先生と共著で発表された水害の速報（「六甲山麓の大水禍速報」地理学、第6巻10号・11号、1938年）の他に、甲南高等学校校友会の名で編集された『昭和13年7月5日の阪神水害記念帳』（甲南高等学校刊、1938年）がある。その中には、山岳部の生徒たちと登られた住吉川上流の「山津波」の跡の記録や西は須磨から東は西宮までの水害の状況の被災図も含まれているし、小学生から高等学校の生徒、そして父兄の被災の体験を記した「作文」も収載されている。こうした編集の殆んどを 松井先生がやられたと聞いている。

1995年の阪神大震災の直後に大学側からの要請で、この『阪神水害記念帳』を約60年ぶりに、甲南大学の復興を期して復刻することになり、何の因縁か私が「解題」を記すはめになった。倒壊した書架と山積みになった本の整理もまゝならないまゝ、史料探しや聴き取りを行なっていたが、同僚の国文学の先生から和田實「細雪の水害」（神戸大学教養部紀要『論集』、第31号、1983年）を示唆された。この論文を辿って調べていくと、谷崎潤一郎が『細雪』の執筆の過程で、この松井先生が編集された『阪神大水害記念帳』を丁寧に読み、『細雪』の山場ともいえる「水害のシーン」（『細

雪』、中巻〔初版 1947 年〕）の描写の重要な資料として採っていることを谷崎自らが記しているのに出会った（『文芸』第10巻4号〔臨時増刊〕、「谷崎潤一郎読本」、昭和31年）。それはこの「水害シーン」が『阪神大水害記念帳』所収の甲南小学校の生徒の作文をヒントにした、というものである。昭和13年の7月の大水害の直後に、被災調査を実施されただけでなく、生徒たちに対し、その体験の生々しさが残るうちに「作文」を書くことを奨め、それをまとめ上げていかれた当時の保々隆矣校長や松井武敏先生の努力とその意義の大きさに感動した次第である。

☆

昨年の3月に、阪神大震災の折に入学した学生たちが巣立っていった。そして、震災直後に彼らの上級生たちが記した震災の記録も全3冊として刊行された。松井先生たちの努力に一步でも近づき得る記録として、できるだけ震災の体験の印象の薄らぐ以前に書いてもらったものの集成である。『阪神大水害記念帳』

（1996年、神戸新聞総合出版センター復刻）がそうであったように、将来の文芸家の眼にとまるかどうかは判らないが、少くとも現在の私にとって、「心の沈み」は幾分か緩和されている。しかし、震災後5年を経たとはいえ、桂川と武庫川を渡る際の気分と心持ちの落差は依然として大きいのである。

講演会の報告

1999年10月30日、文学部において、談話会秋期講演会として、モナーシュ大学教授・京都大学客員教授・J.M. パウエル先生、福井大学助教授・田中和子先生、新潟大学講師・堀健彦先生に講演していただきました。

環境・文化・近代歴史地理学—英語圏における近年の成果—

J. M. パウエル

(モナーシュ大学／京都大学)

英語圏における歴史地理学は、長い間、環境と文化の関わりに強い関心を示してきた。この関心は、ここ3、40年の間、学問としての地理学全体が、人の住まう場所としての大地を記述することにレーゾンデートルを見出してきたこととも関係している。このような姿勢は、George Perkins Marsh の *Man and Nature* (1864) においてすでに完成していたが、原景観 *Urlandschaft* という19世紀後半のドイツの概念や、20世紀はじめに英国で見られた先史時代の集落の発展を環境変遷と関連付けた分析、サウアーらパークレー学派の「文化景観」という概念などにも端を発している。とはいえ、このような環境や景観に関心を寄せる研究が注目を浴びるようになったのは、文脈論的転回が生じ、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』が注目を浴びるなど、西洋

世界に対する反発と環境主義が席卷した1960年代に入ってからである。アメリカの歴史学においても、環境の変化の中に人間の価値や理念など文化史的要素を読み込もうとする姿勢が見られつつあったが、Nash の *Wilderness and the American Mind* (1967) もその延長上に位置付けられる。こうして、環境と文化への関心という共通点において、歴史地理学と環境史とは接点を持つことになった。

しかし、環境主義それ自体は、自然科学、社会科学、人文科学におけるさまざまな領域で反響を呼んでおり、近年では、そのような分野の垣根を超えた潮流に対する応答性によって、逆に歴史地理学者のみならず環境史家もが、個人レベルでも集合的レベルでも度量を試される事態となっている。以下では、このようにして学問分野間の収束が見られる、あるいは潜在的に収束していく可能性をもった領域として以下の四つが挙げられる。すなわち、近代歴史地理学と、①自然地理学・自然生態学、②文化生態学・景観論、③遺跡、アイデンティティ、史跡保全に関する研究、④史料編纂との間の領域である。今回は時間の都合もあるので、④は割愛して①から③について詳しく見ていくことにする。

まず、近代歴史地理学と自然地理学・自然生態学について。1960年代以降、歴史地理学と生物地理学、地形学との協力

関係は、それぞれが自然科学、社会科学を強く志向していったため、あまり一般的ではなくなった。にもかかわらず、好ましい兆候として、先史時代の景観変遷の研究や、歴史時代における水文学研究において、自然地理学者からの働きかけもみられる。年代測定技術の向上もこのような対話関係の促進につながると考えられる。Butlin and Roberts (1995)は、これらの動向を手際よく紹介した論文集で、従来とはまた一つ異なった形の「環境史」の可能性を提示するものとなっている。

次に近代歴史地理学と文化生態学・文化景観論について。文化生態学とは、「文化集団とそれを取り巻く自然環境との間にある関係性を探求する学問であり、「生きている」コミュニティの分析に重点を置く。その主たる関心は、特に、生活のパターンを通じて、文化が居住の場に適応していくその態様に寄せられている。このように文化生態学が歴史地理学に影響を及ぼすようになったのはごく最近のことである。このアプローチは、景観それ自体、あるいは景観と地域的发展との密接な関係性を重視する歴史地理学の伝統と部分的に共鳴しており、自然地理学、文化地理学、政治地理学、社会地理学など、他の下位分野と結びつく可能性も秘めている。

最後に近代歴史地理学と遺跡、アイデンティティ、史跡保全について。ここ 20

年ほどで、社会理論への関心の増大とともに、支配集団を優位におきがちな伝統的な文化の概念に代わって、絶えず権力を行使し行使されるような文化的言説の多様性という考え方が受け入れられるようになってきた。これに伴って、歴史地理学や政治地理学、文化地理学は、ナショナリズムやリージョナリズムのイデオロギーを支える地理的基盤を検討するための共通の土俵を整備することに努めてきた。その上で、遺跡など共同体が伝統的に受け継いできたような場所や景観の保全や表象の問題において、それぞれの関心が交錯していることを認識するようになった。1960 年代から 80 年代にかけて、景観とアイデンティティのつながりに関して広く議論がなされ、90 年代に入ってから議論の輪は広がりつづけているが、このような展開の真新しさは勢いと学際的色彩の強さにあるといえる。

ここで概観した収束は、地理学内において再び力を蓄えるための可能性を示しているように思われる。とはいえ、地理学内での収束のプロセスに関しては、過大に評価してしまった部分もあるかもしれない。このような動向は、社会科学、人文科学の中でみれば、ほんの些細な流れに過ぎない。そこでは、伝統的な専門分野間の分業体制などはもはや分別不可能であろう。地理学内部、他分野との間、いずれの場合にせよ、（専門的な学術誌の短報ではなく）より分量が多く、かつ

一般市民にも受け入れられる研究書が、この収束と対話の秘めた可能性を診断するよき材料となるだろうが、そのことを判断するには時期尚早であろう。歴史地理学にも、市井の声、マイノリティの声、そして土地の声に対してこれまで以上に耳を傾ける姿勢が求められている。

住居移動の時間的空間的軌跡と 都市構造

田中和子（福井大学）
（昭和 54 年卒）

本日の発表では、まず都市内部における住居移動の軌跡を描き出し、どのような空間的パターンがあるかということについて、そして、住居移動の軌跡と地区特性との関連について、さらに、合衆国と南アフリカとの二つの都市における住居移動の軌跡の比較・検討から、都市内部における居住地分化や都市の特質について、それぞれ考えていきたい。人は一生の間にさまざまな動機によって都市間・都市内の移動を行うが、ここでは同じ都市内における住居移動に焦点を当てて分析を行う。

一つ目の事例は 1993 年の 1 月から 3 月に調査を行った合衆国ケンタッキー州のレキシントン、二つ目は 1998 年 9 月に調査を行った南アフリカのプレトリアの事例である。ともに、それぞれの家に

訪問して、移動経歴についての聞き取り調査を行っている。

レキシントンの都市構造をみると、環状道路と都心部から放射状に伸びる道路網を形成している。都心部は衰退が進行し、南部郊外に向けて宅地開発が進んでいる。1990 年の人口は 25 万人となっている。社会経済的特性からみた地区の特性は対比的パターンを示し、黒人地区や貧困層地区が都心と周辺部、北部にかけて多い。それに対して、高学歴者や管理職・専門職の比率が高い地区は、市域南半部、ことに南南東セクターに出現する。住宅の特性については、都心及びその周辺部の古くて小規模な住宅地区、都心周辺部北部の古くて安い住宅地区、環状道路内側の南南東セクターの高価な住宅地区、南西郊外部の高価な住宅地区が認められ、社会経済的特性からみた地域差と対応している。

78 人の調査対象者からは、三つの特徴的な住居移動パターンが認められた。はじめに、より良い住宅への住み替えパターンとして事例を紹介する。一例目は、最初の北部の住居から南部へ、とくに都心に近い南西部からより郊外の南東部へ移動するという軌跡を示す。開発されたばかりの地域の持ち家への移動であり、より恵まれた居住地区への住み替えを示すものである。二例目は、地域の南西部から南東部へという軌跡を描く。この例は、一例目よりも後の世代であって、よ

り外縁を指向した移動を行っており、世代の違いと軌跡の差が表れている。三例目は、移動回数の多い事例。北東部を経て西回りで南部郊外へ到達する。より良い環境へ、住みやすい家へという住み替え行動を行う。住居を新築する余地のある宅地が次第に遠方の郊外に移っていることがわかる。

以上のようなよりよい住居への住み替えは、バージェスの同心円構造と対応するものと考えられるが、必ずしもそうではない場合も認められる。すなわち、愛着のある特定地区への執着を示すパターンとして、以下の三例が挙げられる。一例目は、市内で経験した 9 つの居住地点がすべて環状道路の南側の郊外地区というごく狭い範囲に集中するものであり、なじんだ近隣地区に執着する性癖が強いと言える。二例目は、いずれの時点でも都心地区の居住地へ移動する例である。これは、通勤距離の遠近といった利便性に関係するものではなく、町並みの雰囲気が好きであるという理由にもとづいている。三例目は、一見複雑な軌跡を描くが、大学に近接する地区と南部の環状道路沿いの地区という 2 カ所に居住地点が集中している。長い間望んでいた、レキシントンの中で一番好きな場所に落ち着くという軌跡を描いている。

最後に、以上の二つのパターンとは異なったパターンとして、気ままな住み替えパターンの例を挙げる。この例では移

動頻度が高く、好奇心を持って積極的に移動している。移動に際しては持ち家や賃貸の別、住宅規模などへの特別なこだわりは窺えず、全体的にランダムなパターンを描く。住み替え気質の旺盛さとそれを可能にする状況下からこのようなパターンが生まれると言える。

レキシントンの事例から、以上のような三つのパターンが抽出された。これらのパターンから、多様な住み替えの需要を満たすだけの様々な特性を持った住宅地区がレキシントンという小さな街の中でさえも、居住地分化という形で提供されていることを示しているものと考えられる。

二つ目の事例都市である南アフリカのプレトリアは、もともと植民地都市であり、金鉱の発見とともに都市化がすすんできた。近年では都心地区の荒廃が進み、都心地区の事業所が郊外に移転している。最初の市街地はケスタ地形の谷の部分にあったが、その後南北の尾根を越えて市街地が進展し、近年は南東方向に沿って新しい市街地が広がっている。

人口は 44 万人（1991 年）で、人種別にみると、白人 67%、黒人 26%、ほかにカラード、インド人からなる。西端、東端に黒人居住地、その内側にカラードやインド人の居住地があり、残りが白人の居住地区となっている。都心部に相対的に社会経済的に地位の低い層が集中し、地位の高い地区は市域の南東部の郊外方

向に集中している。このように、都市内の街区には社会経済的にかなり明確な地域差がある。住宅タイプについては、中心部では安価なフラットアパート地区、北部、南東部の一戸建て地区、さらに南東郊外部のタウンハウスという違いが明瞭に表れている。人口変化については、都心部および周辺部での人口減少が顕著で、郊外とくに南東部において開発が進んでいる。

移動経歴の検討について、白人を中上流層と中下流層とに分け、カラード・インド人・黒人を一括して非白人グループとして扱い、全部で三つのグループについて移動の特徴を見る。

中上流層の白人グループについては、東方向や南東方向に移動するパターンなど、中心部から郊外への移動パターン、すなわち、より良い住宅への住み替えパターンが見られた。

中下流層の白人グループでは、都心周辺部を周回するパターンが見て取れる。二つの事例では、賃貸のフラットを転々とするという共通のパターンが見られる。これらの例では、必ずしも自分の希望通りに移動できず、白人層であっても、経済格差によって移動パターンに規定を受けることがわかる。

非白人層グループでは、法律にもとづく強制移転がおこなわれたあと、その地区に定着するパターンが見られる。今後の移動については、希望を持つものと持

たないものがあるが、希望する移転先である旧白人居住地区はすでに黒人やインド人の居住区へと入れ替わりつつあるといった現象も生じている。いずれの例でも、一旦動いたところで終わるという政治的な規制が典型的に表れている。

以上のように、人種や階層の違いが経済的余裕、政治的抑圧と関わっており、住居移動行動パターンに典型的に表れるのがプレトリアの事例である。

二つの都市の事例を総括すると、レキシントンの事例は自由な社会における住居移動、プレトリアの事例は自由でない社会における住居移動であった。とくに後者においては、同じ物理空間に別個の相容れない世界が展開するという都市構造を形成している。人種や階層、人の持つ好みや考え方は多様であるものの、それぞれ特徴的な移動軌跡が抽出され、都市構造を解明する手がかりになることが確認できた。ただし、そうした移動パターンを生むプロセスや要因は、社会、時代によって様々である。バージェスの同心円的都市構造モデルにおいて想定されるようなライフステージによる移動パターンを典型的なものとして捉えるには留保が必要である。

さいごに、居住地としての側面から都市空間を論じる方向を考えたい。二つの都市の事例から、都市の中で居住地区が分化して多様な需要に対応していることが共通の属性と言える。ただし、次に居

住地分化の要因や分化の果てにあるもの
を考える必要がある。その手がかりとし
て、次の点を考えている。一点目に、時
間軸の中で都市が変化していくことを進
化論的に捉えること、二点目に、近接性
や相互作用、自己相関による類似性の生
成といった空間の役割と併せて考えるこ
と、三点目に、人の多様なライフスタイル
と住まいの持つ意味を考えることである。
今後、これらの点を都市空間を考える
手がかりとし、住居移動を考えていき
たい。

奈良・平安期の謄示と土地管理
堀 健彦（新潟大学人文学部）
（平成 5 年卒）

謄示は、荘園において境界を表示する
ために四隅に打たれた木の杭であり、文
字による銘を書いたものであるといった
理解がなされている。謄示に関するこれ
までの研究は、中世の荘園の境界表示と
かかわった中世史研究や歴史地理学にお
ける研究の視点と、律令期の謄示、文書
としての謄示に焦点を当てる古代史研究
という二つの流れが存在したが、謄示の
有り様を統一的に把握していくためには、
両者の研究の間にはいまだ懸隔が存在す
る。本研究では、その懸隔を埋める方向
性を目指す。そのために、土地管理シス
テムとの関係を念頭に置きつつ、謄示の

機能および変遷過程について、規模、境
界、利用形態といった空間の性質を検討
する。また、謄示の存続した理由を見通
す。対象時期としては、文献等の史料に
よって謄示の存在形態が確認可能な最古
の時期に当たり、つづいて謄示がダイナ
ミックに変わった、奈良・平安期を扱う。

まず、謄示の機能と制度的確立につい
てのプロセスについて考察する。先行研
究において、謄示の原初形態は、クシザ
シ、懸札、標、草印、立札であるとされ
ている。これらは、形態と中世における
荘園制下での機能との相互の関係から立
論されているが、そういった見解は、制
度的な謄示の存在によって何らかの変容
を被ったいわば二次的につくられた原初
性である可能性が捨てきれない。そこで、
よりオリジナルな資料、古い時代からの
変遷を追った形で変化を見ていく必要が
ある。

謄を含む最初期における表現として、
律令の中に標謄、門謄、謄などが見られ
た。これらは告知のシステムのなかに見
られ、木の札に文字を伴っていたという
特徴が指摘できる。ここでは、謄示とい
う言葉そのものはまだ表れていない。謄
示という表現が最初に見られるのは、
『類聚三代格』（延暦 1 年（782））に
おさめられた官符においてである。

謄示の機能としては、二点が挙げられ
る。一方は、文字による布告の立札であ
って、要路、橋、津辺、郡家や駅、街衢

に打たれる。もう一つは、領域境界表示であり、神社や寺院、山野河海に見られる。時期的には前者が後者に先行し、また、後者は前者を前提とした発展形態である。

また、従来の研究で関連が深いとされている標、柱などの出現形態を検討してみると、標は山野河海や神域的意識の表出時に使用され、柱は採草、牧、塩木採取用の低山地・丘陵を画すために用いられている。ただし、いずれも、四至との間に明示的な関係は認められない。

勝示の機能と成立経緯の結論として、二点を指摘できる。一点目に、領域境界表示の機能としての標や柱が延暦期以降はほとんど見られなくなる。それゆえ、標や柱の機能が勝示に引き継がれ、領域境界表示としての機能を果たした可能性が考えられる。二点目に、延暦期においては、勝示と四至とが明示的に関連を持つようになったということが指摘できる。この二点から、延暦期は文字の読み書き能力に依拠する律令支配を確立し、その支配が及びうる領域が拡大していった画期であったといえるだろう。

つぎに、勝示との関係が深い事項として、奈良・平安初期における山野管理について考える。山野河海は墓地や資源の採集等に利用される他は、公私の別なく利用することが律令では規定されていた。

平地についての条里呼称法・地割の整備が進む一方で、それに継起する形で山

野河海についても、それぞれの利用形態に応じた管理システムの整備が進んだ。山野空間に対しては、利用形態の明確化や面積把握といった規制が見られる。そのなかで、勝示は山野への進入禁止を示すなどの公的な管理に用いられており、その設置については、国郡刀禰が関与している。

四至が勝示とともに山野管理に導入されるインパクトとしては、律令国家の文書主義的な土地管理システムの一端を担っていたこと、さらに、勝示の持つ文字記載の性質を勘案すれば、四至と勝示のセットが文書主義的原理に基づいた支配を具体的な形態を伴いつつ在地社会に意識させた可能性があるだろう。

同じく山野管理について、つづいて平安中後期について考える。10世紀に関して、以前との連続性が認められる点として、二点が指摘できる。一点目は、山野において見られた、勝示と四至との結合が平地に存在していなかったことから、平野と山野の土地管理システムは別個に存在・運営していたことである。二点目は、勝示の設置の認証者が郡司・刀禰であったことからわかるように、公的権威を背景として勝示が設置される基調が継続していたことである。一方、相違点としては、私領の立券に際して、四至に勝示されるケースが表れるなど、四至と勝示によって管理される領域が変質している点が指摘できる。

勝示が平地においても見られるようになるのは、11世紀のはじめであり、その後の時期において、勝示と四至とが同時に見られる資料が激増する。これは、集落、人間、山野河海を包括して領域的に支配する荘園類型である領域型荘園の成立が背景にある。

この平地・山野の包括は、片方が他方を一方的に支配するものではなく、山起源の領域と平地起源の領域という二つの起点が存在する。山野河海と平地を包括して領域的に支配する荘園類型である領域型荘園の成立は、内部の支配の深化によって進められた。外側を枠づける勝示および四至を用いるという共通性はそのための前提条件であった。

勝示の打ち位置に関する記載の形式としては、四至として勝示が記載されるケースと、四至と勝示が併記されるケースとがある。また、勝示の打ち位置としては、東西南北と対応するものと、四至の東西南北の交点、すなわち巽・坤・乾・艮に対応するものがある。

このような打ち位置記載から考えると、四至は領域の権利保障として公的なシステムの根幹を担っていたと言える。また、現地の記載と併せると、四至を補完するために勝示が機能していたことがわかる。すなわち、領域型荘園の段階においても、勝示は四至のサブシステムとして機能していたと言える。

以上から、本研究の結論は以下の六点

にまとめられる。①土地管理システムの一端を担う勝示は、標等の系譜を引きつつ延暦期に確立した。②領域境界表示としての勝示は、四至との明示的連関のもと、公的な山野管理で使用された。③10世紀半ばに勝示が画する領域の性質が変容し、11世紀初めに勝示が平地に進出した。④領域を単位とした全一的支配の展開に際しても、勝示が具体的境界を示すものとして有効性を発揮した。⑤土地管理システムに組み込まれた勝示は一貫して四至のサブシステムとして存在した。⑥勝示の具体的な形態は柱や棒であっても、現地においてはすぐれて律令国家的支配を象徴する物体として機能した。

研究室便り

＜足利健亮先生のご逝去について＞

人間・環境学研究科教授の足利健亮先生は、昨年8月6日、逝去されました。先生は、永らく文学部及び文学研究科の特殊講義授業をご担当いただき、歴史地理学専攻の多くの研究者を育てていただきました。また、全学共通科目（旧一般教育科目）での名講義を通じて、多くの学生に地理学への眼を開いて下さいました。ご停年を待たずしての、まことに心残りの多い旅立ちであったと存じます。心からご冥福をお祈り申し上げます。

＜応地利明先生のご退官について＞

アジアアフリカ地域研究研究科教授の
応地利明先生は、本年3月31日をもって、京都大学をご退官になりました。先生は、1973年文学部にご着任以来、1994年の東南アジア研究センターへのご転出まで、地理学講座の助教授・教授として、多くの俊秀を育てて下さいました。また、地理学講座の2講座化（のうち大講座化）や、文学部博物館（現在の総合博物館）の開設を始めとして、地理学教室と文学部の発展のためにご尽力いただきました。ご退官記念講義及び祝賀パーティーは、アジアアフリカ地域研究研究科の主催で、2月10日に行われましたが、ご停年1年前のご退官ゆえ、格別名残尽きないものでありました。なお、先生は現在、滋賀県立大学において教鞭をとっておられます。

＜客員教授久武哲也先生のご着任について＞

本年4月1日付けで、甲南大学文学部教授の久武哲也先生が、文学研究科客員教授として着任されました。先生は昭和45年文学部をご卒業、大学院を経て、地理学教室の助手をも勤めていただき、甲南大学に移られました。文化地理学のご専門で、最近大著『文化地理学の系譜』をご出版になりました。客員教授としては、1年間、特殊講義と独書購読をご担当いただきます。

＜国際交流について＞

過去1年間に3人の外国人地理学者が教室に滞在し、講義や講演を行って下さいました。

今後も、このような形での国際交流が深まることを願っております。

まず、オーストラリア・メルボルンの Monash 大学の J.M.Powell 教授が、昨年8月から11月にかけての3ヶ月間、文学研究科客員教授として在籍され、

「Environment, Culture and Modern Historical Geography」に関する講義を担当されますと共に、前ページの紹介のように、地理学談話会においても講演を行って下さいました。

次いで、中国の河南省科学院地理学研究所の王国強教授が、日本学術振興会の招聘研究者として、昨年12月の1ヶ月間教室に籍をき、中国・日本の土地利用に関する研究交流を行うと共に、文学部において「中国における土地評価」に関する講演を行って下さいました。

さらに、ポーランドの古都クラクフ市にある Jagiellonian 大学の R.Mydell 教授が、本年3月の1ヶ月間、京都大学学術後援会の招聘研究者として教室に滞在され、京都市の空間構造に関する研究に従事すると共に、「ウイーンのポーランド人労働者」、「クラクフ市の歴史的発展」、及び「アメリカ都市の危機」に関する講演を行って下さいました。

＜研究室の動静＞

教室の事務は引き続き真木智子さんに御願い致しております。

本年度は、研修員 1 名、特別研修コース 1 名、大学院博士後期課程 5 名、修士課程 9 名、学部 4 回生 8 名、3 回生 9 名、となっております。

〈3 回生〉

本年度は 9 名の 3 回生を迎えました。簡単に自己紹介して頂きます。

朝見優子

研究内容は詳しく決まっていますが、とりあえず地理学専攻を決意しました。自然に興味があり、あちこち動き回るのが好きです。地理学に関しては、全くの勉強不足ですが、これから頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

石田陽介

幼い頃より地図を見ることが好きでした。しかし私が地理学を専攻したのは、単に好きだったからではありません。地理学には現在の諸学に新たな方向性を示す可能性と、芸術の新たな発展の契機となる可能性があると考えようになったからです。宜しく御願います。

北原弘嗣

はじめまして。北原弘嗣と申します。趣味はツーリングでボート部に所属しております。今まではボート一筋でしたが、

これからは学問の方にも力を入れていこうと思います。どうか宜しく御願います。

木下芳大

今年、地理学専修の新 3 回生となった木下と申します。昔から大好きだった地理をいよいよ勉強できるという喜びと、僕にできるだろうかという不安が交錯しています。農に感心があり、週末にサークルで近郊の農家へ出掛けています。遊びも勉強も頑張りたいです。

木村理恵

はじめまして、北河内出身の木村理恵と申します。クラブはライフル射撃部で、渉内主務をやっています。（良く聞かれますが、ライフル射撃は鳥や獣を撃っているわけではありません。）よろしくお願いします。

小林理子

出身は兵庫県小野市、なかなかのどかな田舎です。所属は石原先生のゼミで、現在は教育とか福祉に興味を持っています。あと地図を描くのも好きです。どうぞよろしくお願いします。

室野拓

私は今年、金田先生の教室でお世話になります。出身地が古都、奈良ということもありまして、歴史方面にも興味を持

っています。ここ2年の大学生活は部活として、京都大学交響楽団の活動に没頭していました。今後は音楽に注いだ情熱を学問の方へ向け、優秀な諸先生方、諸先輩方についていけるように精進しますので、宜しくお願いします。

吉岡朝日

生まれは北陸、育ちは東京、そして人格形成の重要な時期にボケ＝ツッコミ文化圏・関西で揉まれた僕に失うものはありません。47都道府県をすべて渡り歩き、2回の補導を受けた経験を生かして、先輩方と共に打倒社会学を目指し頑張りたいと思います。

吉村健志

石川先生のゼミに所属することになりました吉村です。幼い頃から地図を眺めることが好きでした。マンドリン・オーケストラというサークルで楽器を弾いたりもしています。2年間怠けていた分これから頑張りますのでよろしくお願いします。

〈昨年度の実習旅行〉

1999年度は、10月18日～21日まで、三重県鳥羽市において2回生・3回生の計6名が調査を行い、報告書を作成しました。

〈学部卒業生・院生の進路〉

* 学部卒業生

小野雄彦	NTT 西日本
小野寺伴彦	福島県
酒匂幸樹	大学院文学研究科
中辻 享	大学院文学研究科
中村尚弘	大学院文学研究科
村田陽平	大学院文学研究科
山田浩子	ジュンク堂書店

* 修士課程

泉谷洋平	大学院文学研究科
河野良平	大学院文学研究科
横山ともみ	名古屋税関

* 大学院聴講生

奥倉 努

* 博士後期課程

ロサリア・アピラ・タピエス	京都大学研修員
門井直哉	福井大学教育地域科学部助教授
祖田亮次	広島大学総合地誌研究センター助手
今里悟之	大阪大学大学院文学研究科助手

〈院生の研究状況の報告〉

今年度までの院生の研究状況をお知らせします。以下は、閲読を経た論文のリストです。

研修員 ロサリア・アビラ・タピエス

○ Nueva perspectiva de las migraciones españolas, *Anales de Geografía de la Univ. Complutense* (Madrid) 13, pp.111-126 (1993)

○在日外国人と日本人の人口移動パターンの比較研究—大阪市生野区を事例として—, *人文地理* 47-2, 62-76 頁 (1995)

○ Migraciones interiores en Japón, *Estudios Geográficos* (Madrid), 227, pp.297-311 (1997)

○La emigración histórica japonesa a Manchuria: estado de la cuestión y documentación, *Estudios Geográficos* (Madrid), 233, pp.739-753 (1998)

特別研修コース 水野 真彦

○自動車産業の事例から見た企業間連関と近接, *地理学評論* 70A-6, 352-369 頁 (1997)

○機械メーカーと部品サプライヤーの取引関係とその変化, *人文地理* 49-6, 525-545 頁 (1997)

○制度・慣習・進化と産業地理学—90年代の英語圏の地理学と隣接分野の動向から—, *経済地理学年報* 45-2, 120-139 頁 (1999)

D3 李 禧淑

○韓国における氏族マウル住民の移住と適応—ダム建設にともなう移住民・全州

柳氏を事例として—, *人文地理* 49-3, 1-21 頁 (1997)

D3 山村 亜希

○中世鎌倉の都市空間構造, *史林* 80-2, 42-82 頁 (1997)

○守護城下山口の形態と構造, *史林* 82-3, 1-43 頁 (1999)

○南北朝期長門国府の構造とその認識, *人文地理* (掲載予定)

D2 有留 順子

○性差から見た大都市圏における通勤パターン—大阪大都市圏を事例として—, *人文地理* 49-1, 47-63 頁 (1997) 《共著》

D1 泉谷 洋平

○棄権率からみた国政選挙と地方選挙の関係—コンテクスチュアルな視点からの因果分析—, *人文地理* 50-5, 83-97 頁 (1998)

D1 河野 良平

○通信販売の流通システムと空間的特性—大手業者ニッセンの事例をもとに—, *人文地理* 50-6, 44-60 頁 (1998)

M2 中鉢 奈津子

○京都市における高齢者の外出行動, *人文地理* 50-2, 68-83 頁 (1998)

M2 岩崎 しのぶ

○西大寺荘園絵図群と相論一文脈論的アプローチを用いて一, 人文地理 52-1, 5-27 頁 (2000)

M2 上杉 和央

○飛鳥・白鳳期における寺院の立地について, 史林 82-6, 125-149 頁 (1999)

M2 山神 達也

○わが国における人口分布の変動とその日米比較, 人文地理 51-5, 79-96 頁 (1999)

〈2000 年度講義題目〉

* 講義 (系共通科目) *

教授 金田章裕 人文地理学序説

* 特殊講義 *

教授 石原 潤 現代中国の都市と農村

教授 金田章裕 景観史の諸問題

教授 石川義孝 人口地理学の諸問題

客員教授 久武哲也 文化地理学の諸問題

人環教授 金坂清則 地理学における人物
研究の意義と課題

総人教授 山田 誠 比較地域形成論

理学部教授 岡田篤正 地形学

講師 戸祭由美夫 ベネルクス囲郭都市の
比較歴史地誌

講師 川端基夫 企業経営と空間・地域問
題

講師 中谷友樹 空間分析と地理情報処理

講師 岡橋秀典 現代農村の地域学

講師 西山 克 中世王権・怪異・巡礼
経研教授 藤田昌久 地域経済論

* 演習 I *

教授 石原 潤 地理学研究法 I

" 金田章裕 "

" 石川義孝 "

* 演習 II *

教授 石原 潤 人文地理学の諸問題

" 金田章裕 "

" 石川義孝 "

* 講読 *

教授 石原 潤 英語地理書講読

客員教授 久武哲也 独語 "

文研教授 柏倉康夫 仏語 "

人文研助手 高嶋 航 中国 "

* 地理学実習 *

教授 石川義孝

博物館助手 佐藤廉也

講師 森 三紀

* 大学院演習 *

教授 石原 潤 地域の諸問題

" 金田章裕 "

" 石川義孝 "

事務局から

足利 健亮 (S34)

<地理学談話会 1999 年度会計報告>

(1999 年 4 月 1 日～2000 年 3 月 31 日)

【資金会計】

<収入>

年会費	204,350
繰越金	378,863
計	¥ 583,213

<支出>

運営費への振替	208,148
次年度への繰越	375,065
計	¥ 583,213

【運営費会計】

<収入>

資金会計からの振替	208,148
秋期懇親会会費	124,000
春期 "	145,500
計	¥ 477,648

<支出>

秋期懇親会経費	151,202
論文発表会経費	137,127
会報等印刷費	46,000
通信・文具費等	127,569
弔電	15,750
計	¥ 477,648

<計報>

前回の会報発行以降、次の方々が亡く
なれました。謹んでご冥福をお祈りい
申し上げます。(確認分、括弧内の数字
は卒業年、敬称略)

<お知らせ>

以下の会員の住所が不明です。ご存じ
の方は談話会事務局までご一報下さい。

(数字は卒業年、敬称略)

朝井 小太郎 (S6)
都子 厘 (S15)
林 宏 (S16)
今井 平八 (S19)
楓 雅之 (S20)
田島 渡 (S23)
川副 昭人 (S29)
野田 茂生 (S36)
岡本 靖一 (S42)
石角 強 (S45)
西尾 正隆 (S45)
山田 憲子 (S45)
福田 新一 (S46)
池内 麟太郎 (S48)
西沢 仁晴 (S49)
生田 博文 (S51)
長谷川 正雄 (S52)
遠藤 正雄 (S53)
山口 一郎 (S55)
貴志 謙介 (S56)
山下 和久 (S57)
松本 弘史 (S58)
森木 隆浩 (S62)
加藤 典嗣 (S63)
那須 久代 (S63)
山下 良 (H1)

新谷 泰久 (H2)
塚本 誠 (H2)
岩部 敏夫 (H3)
興津 俊之 (H3)
小口 稔 (H3)
坂部 誠治 (H3)
石村 裕輔 (H4)
大野 宏 (H4)
渋谷 良治 (H4)
糸原 健 (H5)
御手洗 央治 (H5)
六嶋 美也子 (H5)
森口 弘美 (H6)
大山 晃司 (H7)
川添 和明 (H7)
西山 隆彦 (H7)
吉野 修司 (H7)
石原 大嗣 (H9)
中川 訓範 (H9)

水内 俊雄 (大阪市立大学助教授)

水野 真彦 (大阪府立大学助手)

懇親会：同日午後 6 時より (会場未定)

☆本年度の談話会費 (1000 円) を、未納の方は、同封の振込用紙にてお払い下さいますよう、よろしくお願いいたします。

【編集後記】

談話会報の発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。御寄稿、御講演いただきました先生方、ありがとうございました。

編集 泉谷洋平
河野良平
真木智子

<2000 年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ>

本年は下記のように実施する予定ですので、あらかじめご予約下さるようお願いいたします。

記

日時：10 月 28 日 (土) 午後 2 時・5 時

場所：京都大学文学部第 7 講義室 (予定)

講演予定者：

木下 良